

苫小牧港カーボンニュートラルポート形成計画の概要について

苫小牧港管理組合

●計画策定の目的

サプライチェーン全体の脱炭素化に取り組む荷主や船社等から選択される港湾形成や脱炭素化に配慮した新たな産業の創出、誘致等を通じた地域の活性化と、わが国のカーボンニュートラル化に貢献するため、CNPとして苫小牧港の目指す将来像を明確にする。

●苫小牧港のポテンシャル

- 国内外の定期航路など、海上輸送ネットワークが充実した港湾
- 発電施設、製油所、製紙工場等が立地し、大量の水素・アンモニアの需要が見込まれる地域
- 多種・多様な産業が集積しているほか、副生水素の利活用や水素製造施設の立地等、再生可能エネルギーの地産・地消が見込まれる地域
- パイプラインや陸・海上輸送によって全道の6割のエネルギー輸送が行われ、原油の備蓄基地が立地する等、エネルギー関連の既存インフラが充実している地域
- 船舶への陸上電力供給、LNGバンカリング、CCS等、カーボンニュートラルにつながる各種実証実験が既に実施されている地域

●目指す将来像

港湾ターミナルの脱炭素化のみならず、わが国の2050年カーボンニュートラルに貢献する苫小牧港の

ポテンシャルを活かした目指す将来像

- ① 北海道・北日本への次世代エネルギーの供給拠点
道内各地や北日本への陸上・海上エネルギー輸送ネットワークや、北米航路等のわが国の玄関口に位置する特徴を活かし、北海道・北日本への水素・燃料アンモニア等の供給拠点をめざす。
- ② わが国の次世代のエネルギー備蓄拠点
北海道唯一の石油精製、石油備蓄機能を有することによる既存施設やノウハウを活用し、非常時等に次世代エネルギーを供給する備蓄拠点をめざす。
- ③ カーボンリサイクルコンビナートの形成
CCSやCO₂船舶輸送等のノウハウを活用し、立地する多様多様な産業間の有機的連携と更なる産業集積による水素の地産地消を含むカーボンリサイクルコンビナートの形成を目指す。

●対象範囲

陸域：苫小牧港港湾計画における土地利用計画の範囲

海域：港湾区域の範囲

●温室効果ガス排出量の推計・削減目標・削減計画

2013年度CO₂排出量：268.4万トン

2030年度CO₂排出目標：2013年度比48%削減

※ 排出量139.6万トン(削減量128.8万トン)

2050年CO₂排出目標：カーボンニュートラル

区分	2013年度CO ₂ 排出量	2030年度の目標達成に向けた削減方策	2030年度CO ₂ 排出量
ターミナル内	1.0万トン	<ul style="list-style-type: none"> ◆ CO₂フリー電力の導入 ◆ 照明LED化 ◆ 定置型燃料電池 ◆ RTGのHV化 ◆ フォークリフトのFC化 	0.7万トン
出入り船舶・車両	5.1万トン	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 係留船舶への陸上電力供給 ◆ フェリー船のLNG燃料転換 ◆ 新規岸壁整備(中央北・周文) ◆ 大型・普通車両のHV化 ◆ 普通車両のFC化 	4.4万トン
合計	6.0万トン		5.1万トン
ターミナル外	262.4万トン	<ul style="list-style-type: none"> ◆ 石炭火力発電所での燃料アンモニア20%混焼 ◆ 石油火力発電所の運転停止 ◆ CO₂フリー電力の導入 ◆ バイオマス燃料への転換 ◆ 天然ガスへの水素30%混焼 	182.0万トン
その他	-	<ul style="list-style-type: none"> ◆ CO₂の回収・固定・活用(SAF等の合成燃料含む) 	△22.0万トン
合計	262.4万トン		160.0万トン
削減方策継続検討分の排出量			△25.5万トン
総計	268.4万トン		※139.6万トン(48%削減)

● 苫小牧港の目指す CNP 及び将来像実現のための方策

① CNP 実現のための方策

- (1) 港湾オペレーションの脱炭素化
- (2) 低・脱炭素燃料バンカリング機能
- (3) 港湾整備による脱炭素化
- (4) 港湾施設におけるブルーカーボン生態系の創出
- (5) 漁業活動の脱炭素化

② 将来像実現のための方策

- (1) 水素・燃料アンモニア等の効率的なサプライチェーンの構築
- (2) 既存の物流インフラによる次世代エネルギーの輸送・供給方法の確立
- (3) 次世代エネルギーの備蓄
- (4) 新千歳空港向けの SAF の生産と供給
- (5) 産業連携による水素等の地産地消

内航コンテナ船「きそ」が初入港しました

苫小牧港管理組合

令和5年6月9日(金)に、内航コンテナ船「きそ」が苫小牧港(東港区中央ふ頭)に初入港しました。

当日は、苫小牧港利用促進協議会(事務局：苫小牧港管理組合)の主催により、入港歓迎セレモニーを開催しました。

「きそ」は、内航コンテナ船としては初となる1,000TEU型コンテナ船シリーズの記念すべき第1船であり、これまでの600TEU型を大きく上回る積載量を誇り、モーダルシフトの需要にも重点的に対応するスペックを有していることから、コンテナ貨物量の増加はもとより、「カーボンニュートラル」や「2024年問題」といった共通課題へのポジティブな効果についても大きな期待が寄せられています。

入港歓迎セレモニーは、「きそ」船内で行われ、多くの関係者や取材陣が見守る中、藤原船長、山崎機関長、井本海運(株)井本社長に対して、記念盾や記念品、花束を贈呈するなど賑やかに行われました。

苫小牧港が開港60周年を迎えた2023年は、「きそ」を運航する井本商運(株)の創立50周年に重なり、それぞれが大きな節目となることから、相互にこれまでの歩みを実感するとともに、今後のさらなる発展について確認するこの上ないタイミングとなりました。

今後も利用者のニーズに的確に対応するとともに「環境価値で選ばれる港湾」の実現に取り組んでいきます。

